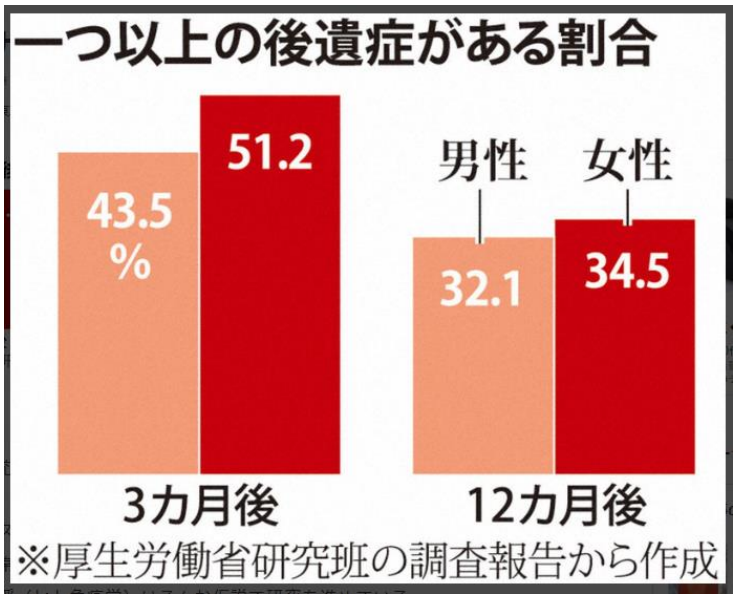
感染症と戦う　新型コロナ・2022 年　後遺症、女性の方が出やすく

2022/7/13 毎日新聞




新型コロナウイルス感染の後遺症は女性の方が表れやすく、特にせき、脱毛、味覚障害などが女性に多いことが分かってきた。男性と女性で、ウイルスを排除する「T 細胞」など免疫の仕組みが異なることが一因との仮説もある。国内の感染者数が再び急増する中、後遺症の研究の進展が期待される。

●免疫反応が影響か

「ウイルス感染による免疫反応でできてくる T 細胞が多すぎたり、少なすぎたりして、正常から外れた時に、後遺症として表れるのではないか」。京都大の上野英樹教授（ヒト免疫学）はそんな仮説で研究を進めている。

上野教授は、昨年夏にピークを迎えた「デルタ株」などの感染者で、後遺症を抱える患者約 70 人の血液を調べた。新型コロナウイルスを排除しようと作られる、免疫獲得に関わる細胞「T 細胞」の量やタイプによって症状が異なる傾向が示された。

たとえば、息苦しさや動悸（どうき）などの症状が強い女性の場合、ウイルスを排除するタイプの T 細胞と、反対に免疫が過剰に働くのを抑えるタイプの T 細胞がともに多くなっていた。免疫の「暴走」だ。これが症状を引き起こすと考えられた。

男性の場合、こうした反応はあまり見られず、上野教授は「女性はもともと男性より関節リウマチなど自己免疫の病気が多い。女性の免疫反応のパターンが自己免疫疾患やコロナの後遺症になりやすいことと関係しているかもしれない」とみている。

一方、男性では、異なるメカニズムで後遺症が表れる可能性が見えてきた。集中力の低下や抑うつ感などが強い人は、T 細胞全体の数が少ない傾向がみられた。

上野教授は「ウイルス感染によってさまざまな臓器にウイルスのかけらが散らばると考えられるが、T 細胞の数が少ないと、こうしたかけらを体から取り除けず、症状が長く残ってしまうのではないか」と推測する。

ただ、現在流行しているオミクロン株の後遺症患者では免疫の反応がまた違う可能性もあるという。上野教授はこれらのデータを世界の研究者に検証してもらい、後遺症のメカニズム解明や T 細胞に着目した治療法の開発につなげたい考えだ。

後遺症についての大規模な患者調査でも、男女の違いは確認された。

厚生労働省研究班（代表＝福永興壱・慶応大教授）は 2020 年 1 月から 21 年 2 月までに新型コロナと確定診断され入院治療を受けた 18 歳以上の患者約 1000 人を対象に後遺症についてアンケートを実施した。全国の 27 施設が参加した国内では最大規模の調査で、診断から 3 カ月、6 カ月、1 年と長期間追跡した。

診断 3 カ月後に一つ以上の症状があった人は全体の 46・3%、6 カ月後では 40・5%。

時間とともに減ったが、1年後でも33%の人に何らかの症状があった。

●多いのはせき、脱毛

男女別でみると、診断3カ月後で症状があったのは男性が43・5%に対して女性が51・2%と高く、女性に多い症状はせき、脱毛、頭痛、味覚障害、嗅覚障害だった。研究班は「女性は、3カ月後時点では有意に後遺症の割合が多い」と結論付けた。

ただ、1年後も症状が残っていたのは男性が32・1%、女性が34・5%。その差は縮まり、男性ではせきや関節痛、筋肉痛、手足のしびれなどが見られた。

年代別では、3カ月後に一つ以上の後遺症がある人は、中年者（41～64歳）が51・9%と最も多く、若年者（40歳以下）43・6%、高齢者（65歳以上）40・1%を上回った。

変異株によって後遺症の特徴は変わるのか。

電話相談窓口を設けている東京都の調査によると、オミクロン株の流行時に、最も多いのは「せき」（38・6%）で、昨年夏に流行したデルタ株以前（22・2%）に比べると大幅に増えた。「倦怠（けんたい）感」が34・0%、「発熱」が17・4%と続くが、デルタ株以前に多く見られた「嗅覚障害」「味覚障害」や「脱毛」は減少した。

東京都などは「後遺症を予防する観点からも感染しないよう基本的な予防策やワクチン接種を」と呼び掛けている。【下桐実雅子】